

# 日本における幼児体育研究の動向と課題

塩田 桃子

Trends and Tasks of Study in Physical Education for Pre-School Children in Japan

Momoko Shiota

## 要約

本稿は、幼児体育研究の過去20年の動向を概観し、幼児体育研究が現段階でどのように理論化されているのか、その到達段階を明らかにすることを目的とした。

はじめに、幼児体育研究の意義を考察し、それを踏まえて学会や大学紀要で発表されている幼児体育研究の動向を探った。その結果、主として幼児期の体力・運動能力の横断的、縦断的変化や男女の性差、運動能力テストの信頼性や妥当性などが研究されていることがわかった。体力・運動能力に関する研究が多く報告されているのは、近年の子どもの体力低下の問題によるものと考えられる。体力・運動能力を把握することは、幼児の運動発達を把握する上で有効かつ重要である。しかし、運動能力テストの研究を考えると、測定・評価することが原因で、幼児の運動・体育ぎらいを生んでいるのではないかと危惧される。幼児の体力・運動能力の評価や向上を目的とする研究ばかりが行われることなく、幼児のその後の影響を踏まえた、すなわち幼児の発達段階と認識の発達における視点を加えた研究が求められる。

キーワード： 幼児体育 体力・運動能力 運動技能 体育指導

2006年10月11日受理（理論）

## はじめに

子どもの体力の低下が叫ばれている今日、あらためてからだづくりについて考えなくてはならないではないかと感じる。体力低下の関わりで現在の子どもの置かれている状況を考えると、遊び場や遊び時間の減少、人間関係の希薄化に伴う遊び仲間の減少などといったことが挙げられる。このような状況は、日常生活における運動経験が以前に比べて格段に乏しくなってきたことを示している。その結果、子どものからだのおかしさが、学校や保育の現場から叫ばれるようになってきた。したがって、それは、子どもの運動経験を充実させられるような環境が今求められているとともに、私たち大人が、一人ひとりの子どもたちのかけがえのない人生を生きていく力に積極的な働きかけをしていかなければならないと言える。

筆者はこれまで、小学校、中学校、高等学校、専門学校、短期大学の学校教育の現場で体育指導を経験してきた。指導期間はそれぞれの現場によって異なり、

短い現場で2ヶ月、長い現場で4年である。経験としては未熟であるが、その少ない経験の中で児童、生徒、学生が本来、備えもった力を十分に発揮できているのだろうか、と疑問に感じる場面が少なからずあった。子どもの発達過程の節目毎に備わるはずの力が獲得できずにきてしまっている、すなわち、育ちそびれている子どもがいるのではないかと感じるのである。

例えば、筆者の担当する授業で次のようなレポートを書いた学生がいた。「私は…運動おんちでした。だから体育が嫌いというよりも苦手です。多分小さいころから何かを最後まで頑張ることをしてこなかったから、逆上がりや、逆立ち、側転、全部できないんやと思う」(A子)。この文章から、体育が嫌いでは無いことが伺える。嫌いでは無いけれど、できないことをできないままにさせられたことによって、苦手意識が生じたと考えられる。まさに、指導のない頑張り主義の体育が生んだ事例である。指導せずして、ただ「頑張り頑張り」と言うだけでは、何をどう頑張れば良いか子どもにはわからない。このような学生に出会うと、

幼児期からからだを存分に使った楽しい活動を十分に味わえるような指導の必要性を感じる。そこで、どの子どもみんなが「できる」「わかる」「楽しい」体育、すなわち、系統的指導による体育を明らかにしたい。

本稿は、これまでの幼児体育における研究の動向を探り、幼児体育研究が現段階でどのように理論化されているのか、学会や大学紀要で報告されている研究を中心にその到達段階を明らかにする。

## 1章 幼児体育研究の意義

### 1節 幼児体育とは何か

「幼児体育」の概念が生まれたのは1970年頃からと考えられる。「幼児の身体運動を単なる遊びの中に組み入れ、『体育遊び』と考えることに疑問を持ち、「幼児の身体活動の理論と方法を明確にし、意図的な身体教育を含む幼児体育を確立すべきではないか」<sup>1)</sup>という富田(1978)の一文がある。これは、「体育あそび」から「幼児体育」への転換を主張したものである。では、「意図的な身体教育を含む幼児体育」とは何かということが問題となる。「幼児体育」という言葉の定義は多く存在する(勝部:1990、畠山:2005、前橋:2006、橋本:1997ほか)。勝部<sup>2)</sup>は「幼児体育とは、人間形成の根幹を培う幼児期の子どもたちを対象として、幼児の心身の特徴に留意し、幼児の発達段階に即した方法で身体運動を行うことによって、健全な心身発達の促進をはかる教育的いとなみである」とし、運動を手段として全人格的教育を行うことの重要性を主張している。畠山<sup>3)</sup>は「幼児体育とは、幼児期の特性を踏まえた身体活動を通して、人間形成の基礎をつくる教育のいとなみである」とし、運動を手段とした人間形成の基礎づくりを主張している。両者ともに「運動を手段とする」ところが共通している。この点は前橋<sup>4)</sup>も同様である。橋本<sup>5)</sup>はからだづくりの重要性を述べ、運動を可能にすることにとどまらず、運動と仲間を通して、生きる力を育みあう活動に教育的配慮と課題を加えたものとしている。勝部らと同様、運動を手段としているが、それに仲間を加えているところが

特徴である。

このように「幼児体育」の定義をみると、その多くは「体育」を「運動を通して」の人間形成の教育又は営みとし、運動を手段とする捉え方が多数を占めているが、一方では、体育とは運動を手段とするのではなく、「運動文化の追求(形容・発展)を自己目的(媒介)とする教育」<sup>6)</sup>という捉え方も存在する。

次に、「幼児」について言及する。幼児体育が対象とする幼児とは、一般的に3歳から就学期までの幼児期後期を指すことが多い。これは、この年齢が意図的な教育をなし得ると判断されていることによるものと考えられる。ところで、「子どもは小さな大人ではない」と言われるように、大人とは異なる子ども独自の発達をみせる。

からだの形態面における特徴として、身長や体重は急速に変化し、身長は5年で出生時の2倍に、体重は出生時の5倍にも成長すると言われる。脳の大きさを表す頭囲は、バランスの上から見ると乳幼児はこれが占める割合が大きく、出生時は胸部の方が小さいが、2歳頃から胸囲の方が大となる。からだの機能面における特徴においては、幼児期に最も発達する神経系は、出生前と出生後の3～4年間で最も急速に発達する時期だと言われている。神経系の中で特にその要素を多く含んでいるのが調整力である。幼児期には調整力を高められるような環境を整備することが重要であることを示唆している。

以上のように、幼児は大人とは違う独自の発達をみせる。したがって、幼児体育がこれらの特性を踏まえた体育教育でなければならない。以上をまとめると、「幼児体育」とは幼児の特性を踏まえ、運動文化の追求(形容・発展)を自己目的(媒介)とする教育と言える。一方、「幼児体育」に類似した用語として「運動あそび」がある。これは一般に、保育で使用されている用語であり、保育計画・指導計画のなかのあそび・課業の一領域として位置づけられ、「運動あそび」とか「全身運動」という形で目標・ねらいが立てられていることが多い。それは保育所保育指針や幼稚園教育要領の「健康」領域において、「体を十分に動かして遊ぶ」とか「運動や遊びを楽しむ」というねらいや内容が記されている

1) 富田玲子、1978、「幼児体育研究の現状に関する一考察」、『清和女子短期大学紀要』、7巻、76-85、清和大学短期大学部  
2) 勝部篤美、1990、『改訂新版 幼児の体育指導』、4-5、学術図書出版  
3) 畠山トミ、1986、『からだ遊び』、24-26、学術図書出版  
4) 日本幼児体育学会編、2006、『幼児体育—理論と実践—』、10、大学教育出版  
5) 全国保育問題研究編、1997、『子どもの身体をつくる食・運動』、98-107、新説売社  
6) 学校体育研究同志会大阪支部のホームページ、<http://www6.plala.or.jp/manzo/dosikai3.htm>、2006.10.7アクセス

ることによるものである。このような位置づけである「運動あそび」の実践研究に関しては、「学校体育研究同志会」や「全国保育問題研究協議会」、「合同保育連絡会」などの研究団体によって多く発表されている。しかし、本稿では、保育における実践研究には立ち入らず、幼児の運動発達<sup>7)</sup>や運動能力を主とする体育研究に絞って、その動向と今後の課題を明らかにすることを目的とする。

## 2節 幼児体育研究のはじまり

幼児体育研究は1970年代頃を皮切りにさまざまな見地からアプローチされている。その契機になったと考えられる三つの事柄を概観する。

第一に、第二次世界大戦後、子どもの栄養状態が良くなるに伴って、体格が目覚ましく大きくなった。しかし、「1960年代に子どもの体力低下が予感されはじめ、1970年に入ると保育現場や学校現場から『子どもがどこかおかしい』と言われるようになった。この頃から、子どもの“身体発達における変化”についての『問題性』が意識されるようになっていった」<sup>8) 9)</sup><sup>10)</sup>。この実態を明らかにするため、正木らが全国調査に乗り出したのは1978年のことである。

第二に、政府による体力づくり国民運動が挙げられる。「1964年に開かれたオリンピック東京大会で期待されるほどのメダルが取れなかったという結果を見て、早速政府は『健康・体力関係閣僚会議』を開き、『国民の健康・体力の増強対策について』という閣議決定を同年12月に行い、『体力づくり国民会議』を発足させ、『体力づくり国民運動』を展開することにな」<sup>11)</sup>った。

第三に、産業界における幼児の早期教育開発が挙げられる。富田<sup>12)</sup>は「ソニー会長井深大氏は幼児開発協会を設立し、知能開発、体操教室、水泳教室、絵画教室等を開設、早期教育の現実化をはかろうとしている。…知的教育、体育教育の早教育は…社会的な広がりをもって、ここに初めて、注目されるようになった」と述べている。

このような背景から幼児体育に関する研究が各分野で押し進められてきたと考えられる。山本<sup>13)</sup>は1978年以降、約十年間の日本体育学会における幼児体育に関する研究をまとめている。そこで特徴的なこととして、運動技能の経年による発達パターンを解明しようとする自然科学系の研究が増えてきていること、また幼児体育における具体的な指導法や教材研究などを解明しようとする社会科学系の研究が限られていることを指摘している。ここで、1970年代後半から1980年代後半にかけての研究課題が、社会科学系の研究であることがわかる。

本稿ではその後の学会（主に日本体育学会・日本保育学会）・大学紀要の報告を中心に、幼児体育に関する研究の動向を探っていくことにする。

## 2章 1980年代後半から現在に至る幼児体育研究の動向

この章では、1986年以降20年間に発表された幼児体育研究を収集し、どのような研究がなされているのかを考察することにする。

ここ20年間において幼児体育研究は数多く発表されており、その内容は一つの領域のみならず、二つの領域にまたがっているものも見られる。これらのことを考慮し、筆者の知見から「体力・運動能力及び運動技能に関する研究」、「幼児の体育指導・援助に関する研究」に分類することにした。

1節では体力・運動能力及び運動技能に関する研究を1) 運動能力の構造、2) 評価及び測定方法、3) 発達と性差、4) 運動能力に及ぼす関連要因、5) その他一運動能力の年次推移に関する研究などに分類した。この分類は『幼児の体力・運動能力の科学』を参考にした。2節では幼児の体育指導・援助に関する研究をまとめた。

### 1節 体力・運動能力及び運動技能に関する研究

はじめに、体力・運動能力及び運動技能とは何かについて触れておく（表1参照）。体力には、行動体力

7) 広義の運動発達は、生涯にわたるヒトの運動行動や運動能力の連続的な変容の過程を意味する。狭義の運動発達は、個体発生的観点（成長や加齢につれてどのように運動が獲得され、また、消失していくかをとらえる）に依拠する変化の過程を意味する。

8) 正木健雄、2000、「子どものからだの『発達不全』と『不調』：実感された“からだのおかしさ”の実体」、『体育学研究』、45巻、267-273、日本体育学会を参考

9) 正木健雄、2002、「データが語る子どものからだと心の危機」、24-25、芽ばえ社を参考

10) 正木健雄、2002、「からだづくり・心づくり-子どもを守る「希望の体育学」-」、健康双書を参考

11) 正木健雄、前掲注10)、267-273

12) 富田玲子、前掲注1)、77

13) 学校体育研究同志会大阪支部編、1990、「幼児の運動文化論」、20-25、あいわ出版

表1. 体力・運動能力及び運動技能に関する用語と解説

用語	解説
体力	大きく身体的要素と精神的要素に分けることができるが、一般的には前者を体力と指すことが多い。さらに、体力の身体的要素には防衛体力と行動体力とがある。
行動体力	運動や労働を有効に進めていくための能力であり、機能的要素と形態的要素に分けることができる。機能的要素においては、その因子として、筋力、瞬発力、筋持久力、全身持久力、調整力、柔軟性など体力テストで測定可能な能力をいう。また、形態的要素として、身長や体重といった体格・体型があげられる。
防衛体力	病原体の侵襲や寒暑などのいわゆるストレスから身を守るための抵抗力をいう。ストレスの種類には大きく分けて、①物理的ストレス(暑さ、寒さ、気圧など)、②生理的ストレス(睡眠不足、疲れなど)、③化学的ストレス(化学物質、酸素欠乏など)、④生物学的ストレス(病原菌、寄生虫など)、⑤精神的ストレス(苦悩、不快など)の5つがある。
体力テスト	体力を診断評価するテストをいう。体力テストで評価される内容は行動体力であり、筋力、瞬発力、筋持久力、全身持久力、平衡性、巧緻性、柔軟性が含まれる。
運動技能	運動能力を下地とし、運動学習によって獲得された身体的成果をいう。大きく基礎運動技能(歩く、走る、跳ぶ、投げるなど)と、専門的運動技能(各種のスポーツで必要とされる専門的な運動技能)に分けることができる。
基礎運動技能	2つあるいはそれ以上の身体部位の運動パターンの組み合わせでできあがっている、一連の基礎的な運動のまとまり(Gallahue;1999)であり、例えば歩く、走る、跳ぶ、投げるなどが挙げられる。
専門的運動技能	スポーツやレクリエーション、日常生活での活動で使われる1つ、もしくはいくつかの基礎的運動技能の組み合わせ(Gallahue;1999)をいう。例えば、野球、サッカー、テニス、水泳、バスケットボール競技などにおいて必要とされる運動技能が挙げられる。

と防衛体力とに大別される。前者は、運動や労働を有効に進めて行くための能力とされており、一般に体力テストで測定可能な能力を指す。また、身長や体重等の形態面も含む。後者は、病原体の侵襲や寒暑などから身を守るための力とされている。運動能力とは、筋力、瞬発力、持久力、平衡性、敏捷性、巧緻性、及び柔軟性など、運動遂行に必要な身体上の多面的な能力の総体と言われる。したがって行動体力とはほぼ同義であり、体力・運動能力という場合は、形態面を含む運動能力を指す。

次に、運動技能とは、「運動能力を下地とし、学習活動(練習)によって獲得された身体的成果」<sup>14)</sup>のことである。さらに、運動技能には立つ、歩く、走る、跳ぶ、投げる、蹴るなどの「基礎的運動技能」と、野球、サッカー、テニス、水泳、バスケットボール競技などにおいて必要とされる運動技能である「専門的運動技能」に大別される。

### 1) 運動能力の構造

ここでは体力・運動能力の構造を明らかにしようとする研究をいくつか挙げることにする。

村瀬・出村(1990)<sup>15)</sup>は、幼児の運動能力の構造を、因子分析法を用いて検討している。4.0-6.5歳の幼児の運動能力は、パワー、柔軟性、筋力、平衡性及び筋持久力の5つから構成されていることを明らかにした。また、出村(1993)<sup>16)</sup>は、幼児の体力の構造も明らかにしている。体格及び体力11変量<sup>17)</sup>からなる相関行列に主因子解、ノーマル・バリマックス法による直交回転を施し、多因子解を求めた結果、全分散量の約81%を説明する体格因子、協応性因子、平衡性因子、及びパワー因子の4つの因子が解釈された。成人の体力構成要素<sup>18)</sup>と類似しているが、協応性因子と平衡性因子が抽出されていることは幼児の体力の特徴と言える。さらに、郷司・出村(1992)<sup>19)</sup>はGallahueの基礎的運動パターンの仮説構造<sup>20)</sup>に基づき、移動型<sup>21)</sup>、操作型<sup>22)</sup>及び安定型<sup>23)</sup>の各領域を構成するパタ

14) 勝部篤美、1991、「幼児体育の理論と実際」、68、杏林書院、

15) 村瀬智彦・出村慎一、1990、「幼児の運動能力評価法の検討」、『体育学研究』、35巻、207-217、日本体育学会

16) 出村慎一、1993、「幼児期におけるボール遠投に対する体力及び投動作の貢献度とその性差」、『体育学研究』、37巻、339-350、日本体育学会

17) ①身長、②体重、③胸囲、④10m往復走、⑤ドッジボール投げ、⑥立ち幅跳び、⑦平均台歩行、⑧両足つま先立ち、⑨両足連続跳び、⑩片足連続跳び、⑪トントテスト(手指の敏捷性テスト)。

18) 体格、筋力、瞬発力、筋持久力、全身持久力、敏捷性、平衡性、協応性、柔軟性などがある。

19) 郷司文男・出村慎一、1992、「行動観察に基づく幼児の運動成就テストの作成」、『体育学研究』、37巻、123-134、日本体育学会

20) Gallahueは基礎的運動技能や専門的運動技能をさらに下位のカテゴリーに分類した。(移動型・操作型・安定型)

21) 1. 基礎的(1要素): 歩く、走る、跳ぶ、跳び越す、ホップする。

2. 組み合わせ(2つまたはそれ以上の要素): 登る、スキップする、滑る、ギャロップする。

22) 1. 推進的: ボールころがし、投げる、蹴る、たたく、打つ、ボレーする、弾ませる。

2. 吸取的: 受ける、トラップする。

23) 1. 体軸の: 曲げる、伸ばす、ひねる、まわす、振る。

2. 静的、動的姿勢: 直立でのバランス、逆立ちバランス、ころがる、スタートする、止まる、よける。

ーン因子を明らかにしている。移動型のパターン因子は、歩・両足跳び運動、片足跳び運動及び上・下肢による登運動<sup>24)</sup>と解釈された。操作型のパターン因子は、ボール捕獲運動、ボール遠投運動及びボール的当て運動と解釈された。安定型のパターン因子は、姿勢安定運動及び動作安定運動と解釈された。

幼児の体力・運動能力の構造を解明することは、幼児の身体特性をより理解する上で役立ち、また、体力・運動能力の測定や評価方法の土台となることから重要であるとされている。次に、これらを基礎とする測定及び評価方法の研究について述べる。

## 2) 測定及び評価方法

測定及び評価方法に関する研究は、主に、運動能力の構造を参考にして、運動能力を把握するためのテストが作成され、その信頼性や妥当性などが検討されている。

幼児の運動能力を測定するテストとして、「一定の協応運動や動作が成就可能か否かの判定によるテスト（以下、合否判定テスト）と最大努力の結果成就されたパフォーマンスによって評価するテスト（以下、運動能力テスト）に大別される」<sup>25)</sup>。また、それとは別に、幼児の運動行動の行動観察に基づいて評価する方法がある。

「運動能力テスト」と「合否判定テスト」との関係についての研究<sup>26) 27)</sup>では、両テスト間で捉えられる基礎的運動能力は高い関係にあることを明らかにしている。

郷司、出村（1992）<sup>28)</sup>は行動観察に基づく幼児の運動成就テストを作成し、その妥当性、信頼性、客観性及び実用性を検討している。この研究では、日頃から保育園や幼稚園における運動あそびの中にテスト内容と類似した運動課題を多く取り入れるようにすれ

ば、実際に測定しなくてもより高い精度で運動能力を推定しうるとし、行動観察に基づくテストは実用性の点から有効であることを明らかにした。その後、運動能力テストの測定値と行動観察による推定値の対応関係についての研究<sup>29)</sup>、合否判定テストの測定値と行動観察による推定値の対応関係についての研究<sup>30)</sup>が発表され、さらに前者の研究を推定順位によって対応関係を明らかにしようとする研究<sup>31)</sup>も報告されている。

## 3) 発達と性差

体力・運動能力及び運動技能における発達や性差に関する研究は非常に多く存在する。

基礎的運動技能の観点から、金・松浦<sup>32)</sup>は量的変化と質的变化の関連について考察している。走、跳、投について、それぞれ運動成就テストと運動パターンテストを行い、両者の関連を検討している。それによると、両テストの関連が高いことから、幼児の運動技能の発達を正確に捉えるためには、量的変化、質的变化の両側面から検討することが重要であると指摘している。さらに、各運動技能の発達と性差において、走運動の量的変化と質的变化は全年齢段階（3.0-7.5歳）においてほぼ直線的な発達傾向がみられ、性差においては量的変化、質的变化ともに男児が優れていることを明らかにした。跳運動においても走運動と同様、直線的な発達傾向がみられる。性差においては3歳を除く全年齢段階で男児が優れていることを明らかにしている。投運動においては、走、跳とは異なる発達傾向がみられ、量的変化、質的变化ともに男児は顕著な発達傾向がみられるのに対し、女児は顕著な発達傾向がみられなかったと述べている。

出村ら<sup>33)</sup>は、最大能力発揮及び合否判定に基づく運動能力テストを用いて、幼児の運動能力の発達及び性差を検討した。その後、出村<sup>34)</sup>は投動作において、

24) 例えばのぼり棒登りや台上登りなどが挙げられる。

25) 郷司文男・出村慎一、前掲注19)、123-134

26) 村瀬智彦・出村慎一、1990、「幼児の運動能力評価法の検討 - いわゆる『運動能力テスト』と『合否判定テスト』との関係について -」、『体育学研究』、35巻、207-127、日本体育学会

27) 郷司文男ら、1999、「合否判定に基づく幼児の運動能力テストと間隔尺度に基づくテストの関係」、『体育学研究』、44巻、345-359、日本体育学会

28) 郷司文男・出村慎一、1992、「行動観察に基づく幼児の運動成就テストの作成 - スクリーニングテストとしての利用 -」、『体育学研究』、37巻、123-134、日本体育学会

29) 村瀬智彦ら、1995、「幼児の運動能力測定における測定値と推定値との対応関係」、『教育医学』、第41巻、195-201、日本教育医学学会

30) 村瀬智彦ら、1997、「幼児の運動能力評価における合否判定テストの測定値と推定値との対応関係」、『教育医学』、第42巻、267-373、日本教育医学学会

31) 村瀬智彦・馬場耕一郎、1998、「4～5歳児の運動行動の観察に基づく推定順位による運動能力評価の妥当性」、『教育医学』、44巻、443-451、日本教育医学学会

32) 金善應・松浦義行、1988、「幼児及び児童における基礎運動技能の量的変化と質的变化に関する研究」、『体育学研究』、33巻、27-38、日本体育学会

33) 出村慎一ら、1990、「幼児期における運動能力の発達とその性差」、『学校保健研究』、32巻、532-538、財団法人学会誌刊行センター

34) 出村慎一、1993、「幼児期におけるボール遠投に対する体力及び投動作の貢献度とその性差」、『体育学研究』、37巻、339-350、日本体育学会

ゴルフボールや硬式テニスボール、軟式テニスボールなどを用いて、各種ボール遠投距離の発達関係、硬式テニスボールの遠投距離と投動作、正確投、体格・体力との関係について言及している。ボール（硬式テニスボール）の遠投距離（量的変化）が著しく伸びる時期は4歳頃からであり、性差は3歳頃から加齢と共に拡大するという。投動作（質的变化）もほぼ同様の傾向にあるが、男児では加齢に伴い大人の投げ方に近づくが、女児では5歳以上でも投パターン<sup>35)</sup> 4以下<sup>36)</sup>が多いことを明らかにしている。松尾<sup>37)</sup>もまた、投動作の発達の変容について分析している。それによると、動作パターンは4歳で明らかな性差が生じ、6歳では男児の平均パターンが6を示すのに対して、女児ではパターン3～5に留まるとしている。これは出村とほぼ同様の結果である。伊藤ら<sup>38)</sup>は投能力の性差に加え、左右差についても分析している。その結果、投能力の性差は右手のみにみられ、左手にはみられないことが明らかになった。このことから、男児においては、日常生活の中での投運動の経験が多く、したがって、これによって生じる練習効果の差が、男女の投能力の差として現れてきているものと考えられると述べている。その他にも、投動作において1年間の縦断的な変化を検討した研究<sup>39)</sup>やその各年齢段階の特徴を検討した研究<sup>40)</sup>、ディスクを用いて遠投距離の加齢変化と性差を言及した研究<sup>41)</sup>、ボール的当て投げの研究<sup>42)</sup>などがある。

跳躍動作においては、着地動作・とび出し動作の加齢に伴う変容について検討している研究がある<sup>43)</sup>。石井らは、とび降りる高さによる衝撃力・姿勢（動作）の加齢変化と、とび降りる寸前のとび出し時の姿勢による加齢変化について言及している。前者においては、加齢にともなって、とび降り着地時の衝撃度の緩衝能力や姿勢に発達が認められる傾向にあること、

とび降り寸前の台からのとび出し姿勢が大きく変化することを明らかにした。後者においては、ある高さまでは、上肢、下肢はあまり屈曲しないでとび出しているが、一定の高さになると、上肢、下肢の曲げを深くすることが明らかになった。両者の結果を合わせると、加齢にともなって、からだ全体を使ってとび降りる動作がスムーズになることを示したという。

#### 4) 体力・運動能力に及ぼす関連要因

幼児の運動能力に影響を及ぼすと考えられる要因における研究に、保育形態と運動指導の影響についての研究がある。吉田ら<sup>45)</sup>は、全国的規模のデータを用いて、保育形態・運動指導が幼児の運動発達に与える影響について検討している。その結果、保育の一環として運動を多く取り入れているよりも、まったく行っていない方が運動能力は高かったこと、保育形態が一斉保育中心の方が自由遊び保育中心に比べて保育の一環としての運動を多く取り入れているものの、自由遊び保育中心の方が運動能力は高かったことを明らかにしている。

藤巻ら<sup>46)</sup>は、母親の運動に対する好き嫌いの態度と子どもの運動発達の関連性について検討している。それによると、3歳半以降可能になるような遊び、あるいは動作の複合度の高い全身運動の発達においては、運動の好きな母親を持つ幼児の方が発達の早いという。

河村ら<sup>47)</sup>は、運動技能の獲得に影響を及ぼしていると思われる環境的諸要因を、園における運動経験の観点から指導の有無、集中的な遊びの経験の二条件について検討している。その結果は、①5歳6ヶ月ころから指導の効果が著しいこと、②テスト前一ヶ月の集中的な遊びの経験はあまり効果がみられないこと、③

35) 宮丸凱史による投動作の発達パターンスコア。子どもの投動作を映画撮影し、多数の動作カテゴリーを設定し、その組み合わせから子どもの投動作を7つのパターンに分類したもの。

36) パターン4以下の投げ方は左足の前方ステップと体のひねりが認められないが、5以上は認められる。したがって、前者を未熟型、後者を成熟型の投動作としている。

37) 松尾知之、2006、「投げる動作の発達1～就学前～」、『子どもと発達』、4巻1号、63-65、日本発達学会

38) 伊藤功子ら、1990、「幼児の投能力の性差および左右差について」、『東海女子短期大学紀要』、16巻、79-82、東海女子大学・東海女子短期大学

39) 川添公仁、1996、「幼稚園児の投動作の発達」、『幼児教育研究紀要』、9号、1-13、名古屋経済大学市頓学園短期大学幼児教育研究会

40) 川添公仁、1997、「幼児の投動作の発達段階における投能力の特徴」、『幼児教育研究紀要』、10号、1-8、名古屋経済大学市頓学園短期大学幼児教育研究会

41) 村瀬智彦・馬場耕一郎、「幼児・児童のディスク遠投距離の加齢変化と性差」、『愛知大学体育学論叢』、13号、1-8、愛知大学体育研究室

42) 西村誠・小倉美津子、1989、「幼児期のボール的当て投げ能力についての研究」、『日本保育学会大会発表論文抄録』、42巻、550-551、日本保育学会

43) 石井美晴ら、1990、「幼児のとび降り着地における床面に及ぼす衝撃度について(1)」、『日本女子体育大学紀要』、20巻、120-127、日本女子体育大学・日本女子体育短期大学

44) 梁川悦美ら、1991、「幼児のとび降り着地における床面に及ぼす衝撃度について(2)」、『日本女子体育大学紀要』、21巻、90-99、日本女子体育大学・日本女子体育短期大学

45) 吉田伊津美ら、2004、「保育形態および運動指導が運動能力に及ぼす影響」、『日本保育学会第57回大会発表論文集』、526-527、日本保育学会

46) 藤巻公裕ら、1990、「母親の運動の好き・嫌いの子供の運動発達」、『日本保育学会大会発表論文抄録』、43巻、472-473、日本保育学会

47) 河村正則ら、1986、「幼児の運動発達に影響を及ぼす環境的要因について(1)」、『日本保育学会大会発表論文抄録』、39巻、568-569、日本保育学会

園での活発度と運動技能に関連性がみられ、活発に動く幼児は技能にすぐれていることが明なになった。その後、村岡ら<sup>48)</sup>は、河村らの同条件で技能習得の程度にかなりの差がみられた二つの園を取り上げ、比較考察した。その結果、運動技能の獲得は、園における保育者の積極的な働きかけの有無に大きく影響されること、その影響は男子の6歳位からより強く認められること、働きかけの内容や方法次第で十分に向上が期待できることを明らかにした。その後も、村岡らは環境的要因を明らかにすべく、保育者の指導と運動能力および運動技能の関連性の研究<sup>49)</sup>、意欲づけの観点からの研究<sup>50)</sup>、園と家庭との相互関連からの研究<sup>51)</sup>、園と家庭との相互関連から個人差を考慮した研究<sup>52)</sup>などを行っている。

#### 5) その他——体力・運動能力の年次推移に関する研究など

穂丸<sup>53) 54)</sup>は幼児の体力・運動能力による30年間の推移を明らかにしている。それによると、体格においては、身長、体重ともに増加傾向であり、大型化しているという。運動能力においては、定量的運動能力<sup>55)</sup>と定性的運動能力<sup>56)</sup>とに大別して考察している。定量的運動能力においては、体格の影響を受けるものやエネルギー出力系の運動能力の発達は向上しているが、ボール投げのような複雑な運動、懸垂や片足立ち等の精神的要素が大きくかかわっている運動は低下の傾向を示しているという。また、目と手の協応によるボールつきは女子において低下傾向が示され、女子のボールを使った遊びの減少が推測されたと述べている。定性的運動能力において、ボールを使った運動能力は、30年前に比較してやや向上した項目もあるが、20年前と比較すると、著しい低下であったという。

また、身体操作系の運動は、開脚跳びだけが向上を示し、他の項目は20年前より低下の傾向であるとしている。身体操作系の運動の特徴は生得的な運動能力というよりも神経—骨格筋の協応性の運動で学習によって育つものとし、これらの運動学習が反映していると述べている。

## 2節 幼児の体育指導・援助に関する研究

幼児の体育指導の研究が口野によって行われている<sup>57) 58) 59)</sup>。“ボール運びゲーム”、“ドッジボール”、“ボールパスゲーム”を教材として、動作と認識の習熟過程を分析している。この研究は「練習」(できることを中心に指導した)グループと「話し合い」(わかることを中心に指導した)グループの比較を行い、指導を加えることによる認識の習熟過程や、動作の変容を明らかにしている。それによると、動作と認識の習熟には関連があるという。ボールゲームにおいて、幼児は自分たちの動きができない(動作)わからない(認識)状況に始まり、少しでもできる(動作)ようになるとどうすればよいかわかる(認識)ようになり、そしてわかった(認識)通りにやろうとするとまたできない(動作)という過程をたどるという。指導においては、動作ができるようになるためには、動作と関連した認識内容を用意することが必要であること指摘している。また、指導の留意点として、子どもの捉え方と大人の捉え方の違いを考慮することや、簡単なものからより高度な内容のものへと変化させていくことなどが挙げられている。また、石井・常田<sup>60)</sup>は、幼児が体育指導に対してどのように受けとめているのかを、幼児の絵と保育者の意見から分析している。体育指導後の幼児の描く絵においては、「ニコニコ」顔や動作の表現が多く、明るさや力強さが見られたことか

48) 村岡真澄ら、1987、「幼児の運動発達に影響を及ぼす環境的要因について (2)」、『日本保育学会大会発表論文抄録』、40巻、280-281、日本保育学会  
 49) 村岡真澄ら、1988、「幼児の運動発達に影響を及ぼす環境的要因について (3)」、『日本保育学会大会発表論文抄録』、41巻、308-309、日本保育学会  
 50) 村岡真澄ら、1989、「幼児の運動発達に影響を及ぼす環境的要因について (4)」、『日本保育学会大会発表論文抄録』、42巻、372-373、日本保育学会  
 51) 村岡真澄ら、1990、「幼児の運動発達に影響を及ぼす環境的要因について (5)」、『日本保育学会大会発表論文抄録』、43巻、492-493、日本保育学会  
 52) 村岡真澄ら、1991、「幼児の運動発達に影響を及ぼす環境的要因について (6)」、『日本保育学会大会発表論文抄録』、44巻、90-91、日本保育学会  
 53) 穂丸武臣、2004、「幼児の体力・運動能力30年間の推移と問題点」、『体育科教育』、52巻12号、24-28、大修館書店  
 54) 穂丸武臣、2003、「幼児の体格・運動能力の30年間の推移とその問題点」、『子どもと発達発達』、1巻2号、128-132、杏林書院  
 55) 量的変化によって評価する運動能力 (20m走、立ち幅跳び、テニスボール投げなど全10項目)  
 56) 「できた」、「できない」で評価する運動能力 (逆上がり、テニスボールの当て、転がりボール蹴りなど全6項目)  
 57) 口野隆史、1997、「体育指導における幼児の“ボールパスゲーム”の習熟過程に関する研究」、『精華女子短期大学紀要』、23号、137-151、精華女子短期大学  
 58) 口野隆史、1998、「体育指導における幼児の“ボール運びゲーム”の習熟過程に関する研究」、『精華女子短期大学紀要』、24号、159-171、精華女子短期大学  
 59) 口野隆史、1999、「幼児のボール遊び (ドッジボール) の指導に関する研究」、『精華女子短期大学紀要』、25号、55-69、精華女子短期大学  
 60) 石井美晴・常田奈津子、1992、「保育科における幼児体育指導に関する研究」、『日本女子体育大学紀要』、22巻、86-95、日本女子体育大学

ら、「幼児体育」での活動を楽しみ、喜んで活動に参加している姿が示されたと述べている。保育者の意見においても、幼児が興味や好奇心をもって活動を楽しみ、充実感や開放感を味わっていること、平常の保育ではみられない、積極性、工夫、表現の姿をみることができると述べている。

村岡<sup>61)</sup> <sup>62)</sup>は、鬼遊びやボールにかかわっての遊びを取り上げ、各年齢（鬼遊び：2～3歳～5歳、ボール遊び：1歳～5歳）の遊び意識を明らかにし、それを育てるための指導・援助を検討している。分析の結果から、遊び意識について、①「芽生えの時期」、②「形成・充実期」、③「発展期」の三つの段階に大別し、その段階に応じて「遊びを知る」「遊びに慣れ、遊びの持続の方策を身をもって知る」「遊び意識を広げ、勝敗のみにこだわらずに多様な楽しさへの視線を転移させる」などの働きかけが重要であると述べている。さらに、遊び意識の段階（「芽生えの時期」「形成・充実期」「発展期」）にそって、運動あそびの発達を分類したカテゴリー<sup>63)</sup>ごとに保育教材や援助方法を具体的に挙げている。

ボールキックにおける援助および留意点に関する研究として、吉田<sup>64)</sup>は蹴り足のスウィング速度、蹴り出すボールの速度などの量的特徴および動作パターンなどの質的特徴を明らかにし、運動発達の観点からボールあそびの援助の留意点を言及している。その結果、足で地面を蹴らないことを意図して行われていると思われる動作が多かったことから、足先の位置のコントロール能力を高めるための環境が必要であり、その能力を高めるための具体例がいくつか挙げられている。

### 3章 幼児体育研究の課題

以上、1986年以降の幼児体育研究を概観した上で、今後の課題を探ることとする。

近年、子どもの体力低下の影響によって、体力・運動能力による研究が多く報告されていると言える。その一つに、幼児の運動能力の測定法・評価法による研究がある。幼児に運動能力テストを行う場合、動機づ

けが困難で課題に集中する時間が短い等の特性を考慮し、短時間でできるテストや複数のテストを組み入れた組テストなどが考案されている。体力・運動能力を把握することは、幼児の運動発達を把握する上で有効かつ重要である。しかし、測定・評価することが原因で、幼児の運動・体育ぎらいを生んでいるのではないかと危惧される。

その理由として、第一に、短時間で行える合否判定テストによって生じる問題が挙げられる。合否判定テストでは、「できる」「できない」の合否で判定される。2歳くらいになると「できる」「できない」という認識が芽ばえ、3歳で「うまい」「へた」を気にするようになってくる。苦手なことはしたくないというのがこの時期からである。「できない」課題が生じた場合、子どもは苦手意識をもってしまい、その後に影響を及ぼしかねない。幼児期にこそ、「できる」経験を豊かにし、「できない」経験に対しては十分な配慮が必要なのではないかと考える。

第二に、最大能力発揮に基づくテストや多数の種目で構成されるテストによって生じる問題である。先にも述べたが、「できる」「できない」、「うまい」「へた」などの二分的評価が可能となる幼児にとって、友達と比べて遅かったり、低かったり、明らかなマイナス評価がわかった場合に、やはり運動に対する苦手意識が生じかねない。また、4歳児半ばごろより、思うようにできないとやらない姿が現れる。これは、動きのしかたにこだわり始めるとともに、周囲への注意や関心が高まることによるものだと考えられている。自己能力評価の客観性が高まるこの時期に、運動能力による最大能力発揮を求めることそのものが可能か否かも再検討する必要があると考える。多数の種目で構成されるテストにおいても同様のことが言える。さらに、多数の種目をこなすことの負担も大きい。以上のことから、測定法・評価法そのものの信頼性や妥当性、実用性の追究に加えて、幼児の側（測定される側）に立ち、その後の影響を踏まえた方法、すなわち、幼児の発達段階と認識の発達における視点を加えたテストの考案が求められていると考える。

幼児にマイナスの影響を及ぼしかねない問題がもう

61) 村岡眞澄、1995、「運動あそびにおける幼児の遊び意識の発達と保育者の援助（2）」、『日本保育学会大会発表論文抄録』、48巻、522-523、日本保育学会

62) 村岡眞澄、1997、「運動あそびにおける幼児の遊び意識の発達と保育者の援助（3）」、『日本保育学会大会発表論文抄録』、50巻、448-449、日本保育学会

63) 動作獲得の遊び、挑戦の遊び、めまいの遊び、ごっこ遊び及び制作の遊びを指す。

64) 吉田和久、2002、「幼児のボールキック運動の特徴」、『保育学研究』、40巻2号、49-56、日本保育学会

一つある。それは、幼児の体力づくりばかりが強調されるあまり、「運動」という文化が軽視されていることが挙げられる。体力向上のみを目指すことによって、同じ練習を繰り返すようなトレーニング的な活動が行われ、「楽しさ」や「おもしろさ」を失ってしまうような活動になったり、強制による従属的な人間像を育ててしまったりしかねない。「運動」という文化を十分に味わい、その過程で達成感や充実感、仲間の良さを感じたり新たな自分を発見したりして、人間性を豊かにし、その結果として、体力が得られるような活動になるべきである。

## おわりに

本稿では、幼児体育研究の過去20年の動向を概観し、幼児体育研究が現段階でどのように理論化されているのかを見てきた。その結果、主として幼児期の体力・運動能力の横断的、縦断的変化や男女の性差、運動能力テストの信頼性や妥当性などが研究されていることがわかった。それらを踏まえて、運動能力テストを行う際に、子どものその後の影響を鑑みた上でのテストを作成することが今後の課題であると考え。また、投能力<sup>65)</sup>は他の能力に比べ男児と女児との差が大きく、加齢にともなってその差は拡大することがわかっているが、その原因が未だ推測レベルでありはっきりとしたことは明らかにされていない。走・跳動作と違って、「意図的に学習しないとなかなか身につけることが困難である」<sup>66)</sup>と言わる投動作の性差が生じる原因を究明することも課題のひとつと言える。

今後は、これらの研究を踏まえ生かして、どの子どもみんなが「できる」「わかる」「楽しい」体育指導のあり方を追究していきたい。

## 謝辞

本稿をまとめるにあたり、先達による業績に負うところが大きかったことを述べておきます。また、ご指導を下さいました京都府立大学服部敬子先生、助言を下さいました筆者が所属する研究室の同僚に深く感謝の意を表します。

(しおた ももこ 本学非常勤講師)

65) ボールを投げる能力を指す。発育発達観点から投能力を調べた研究において、最も広く用いられてきたのは硬式テニスボール投げによる能力である。

66) 青柳美登里ら、1996、『ボール遊び・ボール運動の指導と学習カード』、23-24、小学館